会津医療センターから こんにちは！

【１４】

耳鼻咽喉科学講座
教授　小川　洋

『口から食べる幸せ』

食事をするとむせってしまい肺炎を引き起こす。自分の唾液が気管の中に入ってしまって肺炎を引き起こす。このような肺炎は嚥下機能（えんげきのう、物を飲み込むはたらき）の障害により発症する嚥下性肺炎の中で、誤嚥性肺炎と呼ばれています。高齢者になると、このような病態を起こしやすくなり、肺の機能が低下し、呼吸不全を起こし死に至ります。

急性の呼吸不全に対しては気管内挿管をしたり、気管切開をしたりして人工呼吸器を装着し、呼吸管理をすることがあります。呼吸不全から回復し、人工呼吸器なしでも呼吸状態が安定すれば、体内に挿入したチューブを外して発声をしたり食事をとったりすることができるわけです。

しかし残念なことに、人工呼吸器が不要となっても唾液が気管の中に流れ込んでしまい肺炎を繰り返してしまうことがあります。このような状態が続いてしまうと気管内に管を挿入する必要があり、話をすること、食事をすることができなくなり、点滴やチューブを通して栄養を補給してもどんどん体力が消耗し、口から食べることなく最期の時を迎えることになってしまいます。このような病態は、避けることのできないヒトの宿命ともいえます。

一方で脳梗塞や脳出血、そのほかさまざまな原因で嚥下機能が著しく障害され、食事がとれないという方もいます。

耳鼻咽喉科では、嚥下内視鏡検査や嚥下透視といった検査を行い、誤嚥性肺炎を繰り返す方や嚥下機能障害をきたしている方に、どのようにしたら食事をとれるのか、食事がとれない場合、どのような対応をするのがよいのかについて、言語聴覚士、認定看護師、医師が協力して対応策を検討しています。

食事形態の指導やリハビリを行ったり、究極の誤嚥防止の手段として喉頭気管分離術という手術的な治療を行ったりすることができます。この手術療法では音声を失う代わりに絶対に誤嚥をきたすことはありません。お好きな食事を口から食べることができます。

会津医療センター耳鼻咽喉科は、それぞれの患者さんの「口から食べる幸せ」に寄り添える医療を目指しています。